

『徒然草』研究の序章その3

—短い段の存在価値(前後との関係)について—

土屋 博 映

一、はじめに

本稿は、『徒然草』研究の一環として、文の短い段(短い段)の存在の意味を、個別的に考えることをテーマとするものである。本書自体が一般常識的には百科全書的なところがあり、一貫したものとして捕らえる事はできないかもしれないが、出来る限り、兼好法師の、本書をまとめた意識に迫ってみたいと思う。その手立てとしては、最終的には、その段のキーワードに注目したいと考えている(今回はキーワードをあげるにとどめる)。

二、短い段の個別的検証

「短い段」の定義は、日本古典文学大系の『徒然草』本文で4行以内のもの、と決めた。以下、各段を個別的に検証していく。

1、後の世の事、心に忘れず、仏の道うとからぬ、こころにくし。(第4段・1行)

「忘れず」「うとからぬ」と、消極的な言葉を用いているのは、第3段との関係がある(全集注)。男の生き方として、「色を好む」ことをあげたため、このような表現になった。しかし、男の生き方という流は続いている。「こころにくし」という評価も、第3段、第5段にある「あらまほし」との関連がある。だから、第4段は、完全に独立しているの

ではない。「うとし」「ころにくし」がキーワード。

2、不幸に愁へに沈める人の、頭おろしなど、ふつつかに思ひとりたるにはあらで、あるかなきかに門さしこめて、待つこともなく明し暮したる、さるかたにあらまほし。

頭基中納言のいひけん、配所の月、罪なくて見ん事、さも覚えぬべし。
(第5段・3行)

作者の、男の生き方が、第4段に続いて記される。第3段の「あらまほし」との関連もある。完全に独立した段ではない。「あらまほし」がキーワード。

3、ひとり灯のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなうなぐさむわざなる。

文は文選のあはれなる巻巻、白氏文集、老子のことば、南華の篇。此の国の博士どもの書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。

(第13段・4行)

第12段の末尾「まめやかかの心の友には、はるかにへだたる所のありぬべきぞ、わびしきや」を受けての、連想の発展である。完全に独立した段ではない。「なぐさむ」「あはれなる」がキーワード。

4、神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ。

おほかた、ものの音には、笛・箏・箏。常に聞きたきは、琵琶・和琴。

(第16段・2行)

第15段の末尾「寺・社などに、しのびてこもりたるをかし。」を受けている。完全に独立した段ではない。「なまめかし」「おもしろし」が

キーワード。

5、山寺にかきこもりて、仏に仕うまつるこそ、つれづれもなく、心の濁りも清まる心地すれ。(第17段・2行)

第16段の「神楽こそ、なまめかしく、おもしろけれ」との関連がある。完全に独立した段ではない。「つれづれ」がキーワード

6、なにがしとかやいひし世捨人の、「この世のほだし持たらぬ身に、ただ空の名残のみぞ惜しき」と言ひしこそ、誠にさも覚えぬべけれ。

(第20段・2行)

第19段、最後の部分、「かくて明けゆく空の気色、昨日にかはりたりとは見えねど、ひきかへめづらしき心地ぞする。」を受けている。完全に独立した段ではない。

7、諒闇の年ばかりあはれなる事はあらじ。

碁檯の御所のさまなど、板敷をさげ、葦の御簾をかけて、布の帽額あらあらしく、御調度どもおろそかに、皆人の装束、太刀・平緒まで、ことうなるぞゆゆしき。(第28段・4行)

第27段の最後の部分、「院にはまる人もなきぞさびしげなる。かかる折にぞ、人の心もあらはれぬべき。」と関連あり。完全に独立した段ではない。「あはれなり」と「ゆゆし」がキーワード。

8、甲香は、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどの、細長にさし出でたる貝のふたなり。武蔵国金沢といふ浦にありしを、所の者は、「へなたりと申し侍る」とぞ言ひし。(第34段・3行)

前後の段との、内容的な関係はない。短い段が続くという、文の長さ

での関連はある。「甲香」についての興味が記されている。

9、手のわるき人の、はばかり文書きちらすは、よし。みぐるしとて、人に書かするは、うるさし。(第35段・2行)

前後の段との、内容的な関係はない。短い段が続くという、文の長さでの関連はある。自分の文字の下手な事実を隠そうとしないことをよしとする。「よし」「うるさし」がキーワード。

10、「久しくおとづれぬ比、いかばかり恨むらんと、我が怠り思ひ知られて、言葉なき心地するに、女の方より、『仕丁やある、ひとり』など言ひおこせたるこそ、ありがたくうれしけれ。さる心ざましたる人ぞよき」と、人の申し侍りし、さもあるべき事なり。(第36段・4行)

訪れぬ男を恨まず、女のほうから手紙をよこした、その気持ちをよしとする。気持ちのおおらかさをよしとする点で、35段との関連があるとも言える。「ありがたし」「うれし」「よし」がキーワード。

11、朝夕へだてなく馴れたる人の、ともある時、我に心おき、ひきつくろへるさまに見ゆるこそ、「今更かくやは」など言ふ人もありぬべけれど、なほげにげにしく、よき人かなとぞ覚ゆる。

疎き人の、うちとけたる事など言ひたる、また、よしと思ひつきぬべし。(第37段・4行)

親しい人が、時に遠慮する姿勢を見せ、また親しくない人が、うちとけたりするのを、よしとする。第35段からの流を受ける。独立した段ではない。「げにげにし」「よし」がキーワード。

12、因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘、かたちよしと聞きて、人あ

またいひわたりけれども、この娘、ただ栗をのみ食ひて、更に米のたぐひを食はざりければ、「かかる異様のもの、人に見ゆべきにあらず」とて、親、ゆるさざりけり。(第40段・4行)

栗ばかり食べる女の話である。前後の段との関連は甚だ薄い。独立していると考えられる。この発想は154段のかたわ者を見るのと同等の発想という説もある。

13、柳原の辺に、強盗法印と号する僧ありけり。たびたび強盗にあひたるゆゑに、この名をつけにけるとぞ。(第46段・2行)

前段第46段に続いて、僧侶に愉快なあだ名がつけられた話。正徹本には、この直後に223段の「鶴の大臣殿は」があつて、同様の話が連続している。

14、光親卿、院の最勝講奉行してさぶらひけるを、御前へ召されて、供御を出だされて食はせられけり。さて食ひちらしたる衝重を、御簾の中へさし入れて籠り出でにけり。女房、「あな汚な、誰にとれとてか」など申し合はれければ、「有職の振舞、やんごとなき事なり」と、返返感ぜさせ給ひけるとぞ。(第48段・4行)

有職故実の話の一つ。後段の第49段との関連がある。独立した段ではない。「やんごとなし」がキーワード。

15、人の語り出でたる歌物語の、歌のわるきこそ本意なけれ。少しその道知らん人は、いみじと思ひては語らじ。すべて、いとも知らぬ道の物語したる、かたはらいたく、聞きにくし。

(第57段・3行)

第56段の末尾、「人のみざまのよしあし、才ある人はその事など定め合へるに、己が身をひきかけていひ出でたる、いとわびし。」を受けていると思われる。完全に独立してはいない。「本意なし」「かたはらいたし」「聞きにくし」がキーワード。

16、御産の時甌落す事は、定まれる事にはあらず。御胞衣とどこほる時のまじなひなり。とどこほらせ給はねば、この事なし。

下ざまより事おこりて、させる本説なし。大原の里の甌を召すなり。古き宝蔵の絵に、賤しき人の子産みたる所に、甌落したるを書きたり。

(第61段・4行)

有職故実についてである。前後の段との関連性は薄い。独立していると思われる。

17、後七日の阿闍梨、武者を集むる事、いつとかや盗人にあひにけるより、宿直人として、かくことごとしくなりにけり。一年の相は、この修中のありさまにこそ見ゆなれば、兵を用ゐん事、穩かならぬことなり。

(第63段・3行)

有職故実の話。次の第64段、次の次の第65段と内容的に関連がある。完全に独立してはいない。「ことごとし」「穩かなり」がキーワード。

18、「車の五緒は、必ず人によらず、ほどにつけて、きはむる官・位に至りぬれば、乗るものなり」とぞ、或人仰せられし。(第64段・2行)

有職故実についての話。前段、第63段と、後段、第65段と関連がある。

完全に独立してはいない。

19、この比の冠は、昔よりはるかに高くなりたるなり。古代の冠桶を持ちたる人は、はたを継ぎて、今用ゐるなり。(第65段・2行)

有職故実の話。第63段、第64段と内容的に関連がある。完全に独立してはいない。

20、賤しげなる物、居たるあたりに調度の多き。硯に筆の多き。持仏堂に仏の多き。前栽に石・草木の多き。家の内に子孫の多き。人にあひて詞の多き。願文に作善多く書きのせたる。

多くて見苦しからぬは、文車の文、塵塚の塵。(第72段・4行)

『枕草子』「いやしげなるもの」では、好悪の感情をあらわに見せて描いている。兼好は「多くて見苦しい」ものに焦点をしばらく見ながら、より客観的につきはなして記述している。形式はふまえても内容は全然異質の文字になっている(以上全集)。前段・後段との関連はない。独立している。「いやしげ」がキーワード。

21、世の覚え花やかなるあたりに、嘆も喜もありて、人多く行きとぶらふ中に、ひじり法師の交じりて、言ひ入れたたずみたるこそ、さらずとも見ゆれ。

さるべき故ありとも、法師は人にうとくてありなん。(第76段・3行)

第75段、第77段と同様、僧侶の生き方として関連がある。独立してはいない。「うとし」がキーワード。

22、世中に、その比人のもてあつかひぐさに言ひあへる事、いろふべき

にはあらぬ人の、よく案内知りて、人にも語り聞かせ、問ひ聞きたるこそうけられね。ことに、かたほとりなるひじり法師などぞ、世の上は、わがことと尋ね聞き、いかでかばかりは知りけんと思ゆるまでぞ、言ひ散らすめる。(第77段・4行)

第75段・第76段との関連がある。独立していない。

23、法顕三蔵の、天竺に渡りて、故郷の扇を見ては悲しび、病に臥しては漢の食を願ひ給ひける事を聞きて、「さばかりの人の、無下にこそ、心弱き気色を人の国で見え給ひけれ」と人の言ひしに、弘融僧都、

「優に情ありける三蔵かな」と言ひたりしこそ、法師のやうにもあらず、心にくく覚えしか。(第84段・4行)

第83段と、人間の生き方としての関連がある。「優なり」「心にくし」がキーワード。

24、惟継中納言は、風月の才に富める人なり。一生精進にて、読経うちして、寺法師の円伊僧正と同宿して侍りけるに、文保に三井寺焼かれし時、坊主にあひて、「御坊をば寺法師とこそ申しつれど、寺はなれば、今よりは法師とこそ申さめ」と言はれけり。いみじき秀句なりけり。(第86段・4行)

第83段からの人間の生き方としての流れがある。完全に独立してはいない。「いみじ」がキーワード。

25、或者、小野道風の書ける和漢朗詠集とて持ちたりけるを、ある人、「御相伝、浮ける事には侍らじなれども、四条大納言撰ばれたる物を、道風書かん事、時代や違ひ侍らん。覚束なくこそ」と言ひければ、

「さ候へばこそ、世にありがたき物には侍りけれ」とて、いよいよ秘蔵しけり。(第88段・4行)

第87段、第89段と、愚か者を描くと言う点で、関連していると思われる。完全に独立していない。

26、「箱のくりかたに緒を付くる事、いづかたに付け侍るべきぞ」と、ある有職の人に尋ね申し侍りしかば、「軸に付け、表紙に付くる事、両説なれば、いづれも難なし。文の箱は、多くは右に付く。手箱には軸に付くるも常の事なり」と仰せられき。(第95段・4行)

有職故実の話。第94段からの、有職故実の流れがある。独立していない。

27、めなもみといふ草あり。くちばみに刺されたる人、かの草を揉みて付けぬれば、則ち癒ゆとなん。見知りて置くべし。(第96段・2行)

薬用草の知識の話。知識という点で、第95段と関連ありと思われる。完全には独立していない。

28、その物につきて、その物を費しそなふ物、数を知らずあり。身に虱あり、家に鼠あり、国に賊あり、小人に財あり、君子に仁義あり、僧に法あり。(第97段・2行)

教訓として、第96段との関連ありと思われる。完全に独立してはいない。

29、久我相国は、殿上にて水を召しけるに、主殿司、土器を奉りければ、「まがりを参らせよ」とて、まがりしてぞ召しける。(第100段・2行)

有職故実の話。第99段と内容において関連があると思われる。完全に

独立してはいない。

30、或人、任大臣の節会の内弁を勤められけるに、内記の持ちたる宣命を取らずして、堂上せられにけり。きはまりなき失礼なれども、立ち帰り取るべきにもあらず、思ひわづらはれけるに、六位外記康綱、衣被きの女房をかたらひて、かの宣命を持たせて、忍びやかに奉らせけり。いみじかりけり。(第101段・4行)

有職故実の話。100段と内容において関連があると思われる。完全に独立してはいない。「いみじ」がキーワード。

31、大覚寺殿にて、近習の人も、なぞなぞを作りて解かれける処へ、医師忠守参りたりけるに、侍従大納言公明卿、「我が朝の者とも見えぬ忠守かな」と、なぞなぞにせられにけるを、「唐瓶子」と解きて笑ひ合はれければ、腹立ちて退り出でにけり。(第103段・4行)

前段に続き、身分の低い従者の優雅な振る舞い(全集注)として、103段と関連があると思われる。完全に独立してはいない。「腹立つ」がキーワード。

32、双六の上手といひし人に、その手立を問ひ侍りしかば、「勝たんとうつべからず、負けじとうつべきなり。いづれの手か疾く負けぬべき」と案じて、その手を使はずして、一目なりともおそく負くべき手につくべし」といふ。

道を知れる教、身を治め、国を保たん道も、またしかなり。(第110段・4行)

前段・109段「高名の木のぼり」の話と関連する。完全に独立していな

い。

33、「囲碁・双六好みてあかしくらす人は、四重・五逆にもまされる悪事とぞ思ふ」と、或ひじりの申しし事、耳に止まりて、いみじく覚え侍る。(第111段・2行)

110段との関連あり。独立してはいない。「いみじ」がキーワード。

34、是法法師は、浄土宗に恥ぢずといへども、学匠を立てず、ただ明暮念仏して、やすらかに世を過ぐす有様、いとあらまほし。(第124段・2行)

「閑に過ぐす」ことを実践した是法法師の生活を点出して、前段の志向を具体化している(全集注)というように、前段・第123段との関連あり。また後段125段も僧侶の話で関連があると思われる。独立してはいない。「やすらかなり」「あらまほし」がキーワード。

35、「ばくちの、負きはまりて、残りなく打ち入れんとせんにあひては、打つべからず。立ち返り、続けて勝つべき時の至れると知るべし。その時を知るを、よきばくちといふなり」と或者申しき。(第126段・3行)

絶体絶命の場所から反撃するものの強さということがまずあろう。同時に否定の極点が、否定の否定の契機であることが意識された立論である。前段後半の展開とも関連し、たえず兼好の思考を導いている論理的な側面を注目したい(全集注)とあるように、前段・125段との関連がある。完全に独立してはいない。「よし」がキーワード。

36、あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。(第127段・

1行)

前後の段との関連は薄い。独立している。なお、全集注には次のように記される。*「しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうは、せぬはよきなり」(98段)に同感した兼好の語。「益なし」「よし」がキーワード。

37、貧しき者は財をもて礼とし、老いたる者は力をもて礼とす。

己が分を知りて、及ばざる時は速やかに止むを智といふべし。許さざらんは、人の誤なり。分を知らずして強ひて励むは、己が誤なり。

貧しくて分を知らざれば盗み、力おとろへて分を知らざれば病を受く。

(第131段・4行)

第130段と若干の内容の関連があるかとも思われる。微妙だが、完全に独立していない、と判断しておく。

38、鳥羽の作道は、鳥羽殿建てられて後の号にはあらず。昔よりの名なり。元良親王、元日の奏賀の声、甚だ殊勝にして、大極殿より鳥羽の作道まで聞えけるよし、李部王の記に侍るとかや。(第132段・3行)

有職故実ということで、次の第133段と関係ありと認められる。完全に独立した段ではない。

39、灸治、あまた所に成りぬれば、神事にけがれありといふ事、近く人の言ひ出せるなり。格式等にも見えずとぞ。(第147段・2行)

次の148段、次の次の149段との内容的、有職故実的な関連がある。独立していない。

40、四十以後の人、身に灸を加へて三里を焼かざれば、上気の事あり。

必ず灸すべし。(第148段・2行)

39で述べたとおり、前後の段と関連がある。独立していない。

41、鹿茸を鼻にあてて嗅ぐべからず。小さき虫ありて、鼻より入りて脳を食むといへり。(149段・2行)

39で述べたとおり、前後の段との関連がある。独立していない。

42、為兼大納言入道召し取られて、武士どもうち囲みて、六波羅へ率て行きければ、資朝卿、一条わたりにてこれを見て、「あな羨まし。世

にあらん思ひ出、かくこそあらまほしけれ」とぞ言はれける。(第153段・3行)

全集注には、つぎのようにある。*152段〜154段の三段は、日野資朝に關する一連の聞き書きであるが、兼好の簡潔な筆は、それぞれ資朝の剛直かつ意志的な性格を、躍動させている。兼好の好みからすれば、このような剛直な態度には同感しないはずであるが、資朝の意志的な性格とその力強い決断とには、当然共感を寄せたに相違ない。従来の誤りを確認するや、直ちにこれを一挙に全面的に否定する資朝の態度に対して「さも有りぬべき事なり」と結んでいるところにも、彼の共感の積極的な表示が見られる。これだけリアルに描ききるには、資朝に対する兼好の関心が並々でなかつた、ということ、前後の段と関連しており、独立していない。「うらやまし」「あらまほし」がキーワード。

43、大臣の大饗は、さるべき所を申しうけて行ふ、常の事なり。宇治左大臣殿は、東三条殿にておこなはる。内裏にてありけるを、申されけるによりて、他所へ行幸ありけり。させることによせなけれども、女

院の御所など借り申す。故実なりとぞ。(第156段・4行)

有職故実の話。前段の第155段は「機嫌を知る」話、後段の第157段は「心」についての話で、特別な関連はない。独立している。

44、「盃のそこを捨つる事は、いかが心得たる」と、或人の尋ねさせ給ひしに、「凝当と申し侍るは、そこに凝りたるを捨つるにや候ふらん」と申し侍りしかば、「さにはあらず。魚道なり。流を残して、口のつきたる所をすすぐなり」とぞ仰せられし。(第158段・4行)

次の第159段の「みなむすび」の話と、教養という点で関連があると思われる。完全には独立していない。

45、「みなむすびといふは、糸を結びかさねたるが、蟻といふ貝に似たればいふ」と或やん事なき人の仰せられき。「にな」といふは誤りなり。(第159段・2行)

教養の話として、前段と関連すると見ることが出来る。完全に独立してはいない。

46、花のさかりは、冬至より百五十日とも、時正の後、七日ともいへど、立春より七十五日、おほやう違はず。(第161段・2行)

第158段から続く、教養の話として、関連があると思われる。完全に独立してはいない。

47、太衝の太の字、点うつ、うたずといふ事、陰陽のともがら、相論の事ありけり。盛親入道申し侍りしは、「吉平が自筆の占文の裏に書かれたる御記、近衛関白殿にあり。点うちたるを書きたりと申しき。

(第163段・3行)

有職故実の話。前段・162段との関連はないが、その前の段・161段の流

は受けている。162段の位置づけが問題だが、関連なしともいいきれない。微妙な段である。

48、世の人あひ会ふ時、暫くも黙止する事なし。必ず言葉あり。その事を聞くに、多くは無益の談なり。世間の浮説、人の是非、自他のために失おほく、得少し。これを語る時、互ひの心に無益の事なりといふ事を知らず。(第164段・4行)

全集注には、次のようにある。*108段で無益に時を送ることが修道者にとり、いかに愚かしいかであるかを述べ、170段では無益を拒否すべきことを述べている。そのいずれも無益と自覚していない人間の愚かしさがあるかどうかは微妙である。

49、あづまの人の都の人に交わり、都の人の吾妻に行きて身を立て、また、本寺・本山を離れぬる頭蜜の僧、すべて我が俗にあらずして人に交れる、見ぐるし。(第165段・3行)

前述のとおり、第163段、第165段の関連は微妙で、短い文の段が続く、ということだけが関連している。

50、人間の営み合へるわざを見るに、春の日に雪仏を作りて、そのために金銀珠玉のかざりを営み、堂をたてんとするに似たり。その構へをまちて、よく安置してんや。人の命ありと見るほども、下より消ゆること、雪のごとくなるうちに、営み待つ事甚だ多し。(第166段・4

行)

無常を具体化した段だが、これは第163段から短い段が続くだけで、内容的な関連はない。独立していると見られる。

51、「何事の式といふ事は、後嵯峨の御代までは言はざりけるを、近きほどよりいふ詞なり」と人の申し侍りしに、建礼門院の右京大夫、後鳥羽院の御位の後、また内裏住みしたる事をいふに、「世の式もかはりたる事はなきにも」と書きたり。(第169段・4行)

有職故実的な話。前後と内容的な関係はない。独立している。

52、小野小町が事、きはめて定かならず。衰へたるさまは、玉造と言ふ文にみえたり。この文、清行が書けりといふ説あれど、高野大師の御作の目録に入れり。大師は承和のはじめにかくれ給へり。小町がさかりなる事、その後の事にや、なほ覚束なし。(第173段・4行)

全集注には次のようにある。*単なる有職故実的な興味だけでなく、これを証明するプロセスに兼好らしさを見るべきと、ということだが、前後の関連は薄く、独立していると考えられる。「おぼつかなし」がキーワード。

53、黒戸は、小松御門位につかせ給ひて、昔ただ人におはしましし時、まさな事をせさせ給ひしを忘れ給はで、常に営ませ給ひける間なり。御新にすすけたれば、黒戸といふとぞ。(第176段・3行)

全集注には、次のようにある。*有職故実。巻末になると多くなることは無視できない。兼好の末期の生活と重なるものとして、注目すべき、ということだが、次の177段と、教養的な話として関連があると思われる。完全には独立していない。「まさなし」がキーワード。

54、或所の侍ども、内侍所の御神楽を見て、人にかたるとて、「宝剑をばその人ぞもち給ひつる」などいふを聞きて、内なる女房の中に、「別殿の行幸には、晝御座の御剣にてこそあれ。」としのびやかに言ひたりし、心にくかりき。その人古き典侍なりけるとかや。(第178段・4行)

有職故実であり、176段から始まる流れによる。独立していない。「心にくし」がキーワード。

55、さぎちやうは、正月に打ちたる毬杖を、真言院より神泉苑へ出して焼きあぐるなり。「法成就の池にこそ」とはやすは、神泉苑の池をいふなり。(第180段・2行)

176段から始まる、教養的な内容を受けている。独立してはいない。
56、四条大納言隆親卿、乾鮭と言ふものを、供御にまゐらせられたりけるを、「かくあやしき物、参るやうあらじ」と、人の申しけるを聞きて、大納言、「鮭といふ魚、まゐらぬ事にてあらんにこそあれ。鮭の白乾、何条事かあらん、鮎の白乾は、まゐらぬかは」と申されけり。(第182段・4行)

全集注には、次のようにある。*故実。大納言の、強引で、かつユーモラスな論法に、兼好の興味や同感があった。ただし、きわめて形式的以下、このような論が垣間見られる、と記されている。176段から始まる、有職故実また教養的な流れを受けている。独立しているのではない。

57、人つく牛をば角を切り、人くふ馬をば耳を切りて、その標とす。標をつけずして人を傷らせぬるは、主のとがなり。人くふ犬をば養ひか

ふべからず。これみなどがあり。律の禁なり。(第183段・3行)

176 段から始まる、教養的な流れを受けている。独立しているのではない。

58、神仏にも、人のまうでぬ日、夜まゐりたる、よし。(第192段・1行)

前段・191段の末尾部分、「女も、夜ふくる程にすべりつつ、鏡とりて、顔などつくるひて出づるこそをかしけれ。」との関連があると思われる。完全に独立してはいない。

59、諸寺の僧のみにあらず、定額の女儒といふ事、延喜式に見えたり。すべて、数定まりたる公人の通号にこそ。(第197段・2行)

以下、有職故実・教養に関する話が連続する。独立して存在するのではない。

60、揚名介に限らず、揚名日といふものもあり。政治要略にあり。(第198段・1行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

61、横川行宣法印が申し侍りしは、「唐土は呂の国なり。律の音なし。和国は単律の国にて、呂の音なし」と申しき。(第199段・2行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

62、呉竹は葉ほそく、河竹は葉ひろし。御溝にちかきは河竹、仁寿殿のかたによりて植ゑられたるは呉竹なり。(第200段・2行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

63、退凡・下乗の卒都婆、外なるは下乗、内なるは退凡なり。(第201

段・1行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

64、犯人を笞にてうつ時は、拷器によせて結ひつくるなり。拷器の様も、よする作法も、今はわきまへ知れる人なしとぞ。(第204段・2行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

65、比叡山に、大師勸請の起請といふ事は、慈恵僧正書き始め給ひけるなり。起請文といふ事、法曹にはその沙汰なし。いにしへの聖代、すべて起請文につきて行はるる政はなきを、近代、この事流布したるなり。

また、法令には、水火に穢を立てず、入物には穢あるべし。(第205段・4行)

197段から続く、有職故実・教養の話。関連あり。独立してはいない。

66、「呼子鳥は春のものなり」とばかりいひて、如何なる鳥とも、さだかにしるせる物なし。ある真言書の中に、呼子鳥なく時、招魂の法をばおこなふ次第あり。これは鶴なり。万葉集の長歌に、「霞たつながき春日の」などつづけたり。鶴鳥も呼子鳥のことざまに通ひてきこゆ。(第210段・4行)

教養的な話。前後との関連はうかがえない。独立している。

67、秋の月は、限りなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれとて、思ひ分かさらん人は、無下に心うかるべき事なり。(第212段・2行)

前後の段との直接の関連はない。独立している。「めでたし」「心う

し」がキーワード。

68、御前の火炉に火をおく時は、火ばししてはさむ事なし。土器より、ただちにうつすべし。されば、ころびおちぬやうに、心得て炭をつむべきなり。

八幡の御幸に供奉の人、浄衣をきて、手にて炭をさされければ、ある有職の人、「白き物をきたる日は火ばしを用ゐる、くるしからず」と申されけり。(第213段・4行)

次の段と、教養的な話として、関連があるように思われる。完全に独立しているのではない。

69、狐は人にくひつくものなり。堀川殿にて、舍人が、寝たる足を狐にくはる。仁和寺にて、夜、本寺の前を通る下法師に、狐三つ飛びかかりて食ひつきければ、刀をぬきて、これを防ぐ間、狐二疋をつく。ひとつはつきころしぬ。二つはにげぬ。法師はあまた所くはれながら、事故なかりけり。(第218段・4行)

狐は人に食いつくという事実を述べている。前後との関連は薄いと思われる。独立していると考えられる。

70、田鶴の大臣殿は、童名たづ君なり。鶴をかひ給ひけるゆゑにと申すは僻事なり。(第223段・2行)

内容的には、前後との関連がないが、人物伝としては、関連している。完全に独立しているとはいえない。

71、六時礼賛は、法然上人の弟子、安楽といひける僧、経文をあつめて造りて、勤めにしけり。その後、太秦善観房といふ僧、節博士を定め

て、声明になせり。「一念の念仏」の最初なり。後嵯峨院の御代よりは生まれり。法事讀も、同じく善観房はじめたるなり。(第227段・4行)

次の228段と関連あり。完全に独立しているのではない。

72、千本の釈迦念仏は、文永の比、如輪上人、これをはじめられけり。(第228段・1行)

前段・227段との関連あり。完全に独立しているのではない。

73、よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたらず。(第229段・1行)

内容的には、前後の段と関連がないのだが、短文で事実を記そうという点、229段と関連があるとも見られる。微妙である。

74、八月十五日、九月十三日は、婁宿なり。この宿、清明なる故に、月を翫ぶに良夜とす。(第239段・2行)

教養的なものを述べた段。前後の段との関連は薄い。独立していると思われる。

三、問題となる段の検証

本稿での目的は、短い段の存在の意味を考えることである。独立していないものは前後との関係の中で書かれたので、短くても随想的な意味ありと認定した。短くて独立した段は、随想的な意味合いがあるのかどうか、今でいえば、メモー単なる記録的なもの—ということも考えられる。もしもそうであれば、『徒然草』が、いわゆる、現代で言う随筆

(エッセイ) だと言いつ切るのは、まずいかもしれない、という提言にもなることだろう。

以下、短くて独立している段をあげる。

- 8、甲香は、ほら貝のやうなるが (第34段)
 - 9、手のわるき人の、はばかりず文書きちらすは (第35段)
 - 10、「久しくおとづれぬ比、いかばかり (第36段)
 - 12、因幡国に、何の入道とかやいふ者の娘 (第40段)
 - 16、御産の時甌落す事は、定まれる事にはあらず (第61段)
 - 20、賤しげなる物、居たるあたりに調度の多き (第72段)
 - 36、あらためて益なき事は (第127段)
 - 47、太衝の太の字、点うつ、うたずといふ事 (第163段)
 - 48、世の人のあひ会ふ時、暫くも黙止する事なし (第164段)
 - 49、あづまの人の都の人に交わり (第165段)
 - 50、人間の営み合へるわざを見るに (第166段)
 - 51、「何事の式といふ事は、後嵯峨の御代までは (第169段)
 - 66、「呼子鳥は春のものなり」とばかりいひて (第210段)
 - 67、秋の月は、限りなくめでたきものなり (第212段)
 - 69、狐は人にくひつくものなり (第218段)
 - 73、よき細工は少しにおき刀をつかふといふ (第229段)
 - 74、八月十五日、九月十三日は、ろう宿なり (第239段)
- 以上であるが、このうち、8、9、10と、47、48、49、50、の例は短い段の連続から成り立っている。これらを検証してみる。

8～10 (第34段～第36段) の場合は、さらに第33段 (5行) と第37段 (5行) という短い段が前後に存在する。つまり短い段が連続している。短い段の連続は、それなりにオムニバス形式と考えれば、随想と言えるだろう。また、いったい、何行あれば随想なのか、それは長さではなく内容なのだろうが、今回の研究で、4行あれば、かなりのことが言える、つまり自己主張ができるといえそうなことがわかった。4行あり、内容に主張がみられれば、それは随想と判断してよさそう。

そこで、この一連の短い段を見てみると、第35段～第37段は、自分と関わる人の態度について、善悪を「よし」として判断していることがわかる。よって第35段は、2行であるが、後の段との関係から、結局独立していないと判断できる。

そこで、問題となるのが、8 (第34段) である。「甲香は」で始まるこの段は、内容的には、まったく前後と無関係に存在しているように見える。

次に47～50 (第163段～第166段) であるが、48～50は、人の生き方について、直後の第167段を導くものと考えられる。随想と考えてよい。

そこで、問題となるのが47 (第163段) である。「太衝の太の字」で始まるこの段は、内容的には、まったく前後と無関係に存在しているように見える。

では、それ以外の例はどうだろうか。

20 (第72段) は「賤しげなるもの」である。これは当然『枕草子』を念頭においている。そういう意味では、随想と言ってよい。

36 (第127段) は「あらためて益なき事は」である。これは独立して問題である。

51 (第169段) は「何事の式といふ事は」である。これは独立して問題である。

66 (第210段) は「呼子鳥は春のものなり」である。これは独立して問題である。

67 (第212段) は「秋の月は、限りなくめでたきものなり」である。これは独立して問題である。

69 (第218段) は「狐は人にくひつくものなり」である。これは独立して問題である。

73 (第229段) は「よき細工は、少しにぶき」である。これは独立して問題である。

74 (第239段) は「八月十五日」である。これは独立して問題である。

ということ、前後の段と、内容的に無関係で、短い段、8・12・16・36・47・51・66・67・69・73・74、の11例の存在が問題として、残った。

これらを、その内容から分類すると、次のようになる。

- ① 自己の体験 8・47・51
- ② 伝え聞き 12・69
- ③ 有職故実 16
- ④ 教養 66・74
- ⑤ 主張 36・67・73

①と②は過去の出来事であり、彼の随想の基礎知識となるものと考えることができ、随想の一步手前といったところであろう。また③と④は、教養的なものであり、この点、徒然草が、便利帳的な意味合いを持つてゐることは、否めないと思われる。いわゆる随想という思想があらゆる段に及んでいたのではないということが言えようである。

ここで考えてみたいのは、短いながら、主張が感じられる⑤の、三つの段である。

四、三つの段

36、あらためて益なき事は、あらためぬをよしとするなり。(第127段)

67、秋の月は、限りなくめでたきものなり。いつとも月はかくこそあれとて、思ひ分かざらん人は、無下に心うかるべき事なり。(第212段)

73、よき細工は、少しにぶき刀をつかふといふ。妙観が刀はいたくたらず(第229段)

これら三つの段は、短いながら、すべて主張がある。とくに67などは、随想の代表のような表現をしている。また73は、評論家小林秀雄が、兼好の気持ちを表している段として注目していた。

ここで、本稿では36の例に注目してみたい。実は、第98段に、次のような例がある。

「尊きひじりの云ひ置きける事を書き付けて、一言芳談とかや名づけたる草子を見侍りしに、心にあひて覚えし事ども。

一 しやせまし、せずやあらましと思ふ事は、おほやうは、せぬはよきなり。(後略)」

この後、4項目があげられる。ここには、尊い聖人の名言に感動している兼好の気持ちを読み取れる。つまり、兼好にはそういう名言への指向があったと思われるのである。名言というのは、結論を聞くものに判断させる傾向にある。鎌倉仏教などの影響があったかもしれない。『徒然草』は、「名言集」の意味合いをもっていたと考えると、すべて合点がいく。

67の例は、二つの文で成り立っているところが、36とは異なる。今回の論では、焦点をしばらくきれなかったが、一文で成り立つ段を、すべてまとめて眺めると、兼好の目論見が見えてくるかもしれない。また67は内容から言っても、名言ではない。随想の一種であろうが、それにしても、迫力のない段であるとしかしいようがない。

73も二つの文である。しかし、兼好は名言としてとらえていた可能性がある。

この段は、小林秀雄が『無常といふ事』の中で、「彼は利き過ぎる腕と鈍い刀の必要を痛感している自分の事を言っているのである。彼が見えすぎる事を如何に御したらいいか、これが『徒然草』の文体の精髓である。」と褒め称えたため、有名となったのだが、果たしてそれほどの価値があるのか、疑問である。この段のおもしろさは、「よき」と「にぶき」の対照的な面である。「よき細工」なら、「利き刀」を使うであろうという常識破りの「にぶき」を使うところが面白いのである。そこま

でが名言。「妙観が刀はいたくたたず」は、それに具体性を持たせたものの。持たせたに過ぎない、と言っておこうか。「妙観」という人物についても、実は定かではない。

ここで思い出されるのが、兼好が、『平家物語』の作者を、信濃前行長と断定している点である(226段)。ことの真偽はともかく、具体例をいれることは、兼好の論の基本となるところであろう。具体性は、読者を納得させるのに効果抜群だからである。「妙観」もその程度のものではないかと思われる。

いろいろと思い浮かぶことはあるのだが、今の時点では、そこまですべてとどめたい。キーワードの検証と、短い段のより精細な研究を続けていきたい。